

## 天理教教理における海外伝道について

## 『逸話篇』における海外伝道について

今回から台湾における天理教伝道史について述べていくことになるが、その前に天理教にとって海外伝道とはどのようなものであるのかを教理的に理解する必要がある。天理教の三原典の一つである「おさしづ」の中には、はっきりと海外伝道について言及されている箇所がある。しかし、この神言は具体的な伺いに対して答えられたものである。そのため、内容の理解はそれほど難しくないものの、天理教教理におけるいくつかの事例についてのものであって、海外伝道全体を包括するような内容とは言えない。一方、『稿本天理教教祖伝逸話篇』の第168話「船遊び」の内容は、海外伝道について教理的な理解を進めるための示唆に富んでいる。

教祖は、ある時、梶本ひさ（注、後の山沢ひさ）に向かって、「一度船遊びしてみたいなあ。わしが船遊びしたら、二年でも三年でも、帰られぬやろうなあ。」と、仰せられた。海の外までも親神様の思召しの弘まる日を、見抜き見通されてのお言葉と伝えられる。

この逸話は海外伝道についての教祖のお言葉と伝えられているが、短い逸話の中から、神意のすべてを悟ることは容易ではない。この何気ないような短いお言葉の中に、天理教の海外伝道の真意やつとめ方について何が教えられているかを読み解こうとすると、さらに解釈が難しくなる。海外部長を務めた三濱善朗本部長は、立教170年（2007年）4月の教会本部月次祭での神殿講話の中で、この逸話を引きながら次のような悟りを示している。

いかに隔たった地であり、自分の生まれ育った環境と異なる場所であっても、布教は楽しみである、とのことを「船遊び」と喩えられ、だがそれには時間がかかるとの意とくみ取らせていただくのであります。教祖が「二年でも三年でも、帰られぬやろうなあ」と仰せられるところに、長い年月のかかることを意味されたのではないかと思うのであります。私どもにとっては未知の年数であるかもしれない。しかし、それとて長い楽しみを持って通ることにある、と、思慮足らずではありますが、そのように悟らせていただくのであります。

このように、海外まで教えが広まることを「船遊び」と喩え、それが楽しみであること、そして「なかなか帰ってこられない」というところに時間をかけて「世界たすけ」をすすめていくという神意の深さについて、三濱本部長は説明している。

## 「おさしづ」における海外伝道について

教祖が現身を隠されて後、本席と定められた飯降伊蔵が「おさしづ」を取り次いだのは、明治20年から40年の間であるから、この期間における海外伝道についての神言は、明治期にすでに伝道活動が進められていた地域、つまり日本と地理的にも文化的にも近い朝鮮半島や台湾についてのものがほとんどである。

海外伝道の嚆矢とされる韓国伝道については、高知分教会新居出張所の役員であった里見半次郎の朝鮮派出願に対する神言がある。

さあ〜尋ねる事情〜、さあ〜尋ねる処、いかなる事

情もどういふ事情も、心の理に委せ置こう。さあ〜心勇んですれば何時なりと。又一つ、心事情に委せ置くによって、さあ〜何時なりと〜。(明治26年10月19日)

この「おさしづ」では、特に「さあ〜心勇んですれば何時なりと」との言葉に、親神の守護が感じられる。そして海を渡って天理教の教えを広めたいという伺いに対して、その伝道に従事する者が「心勇んですれば何時なりと。」という心強いお言葉が出されている。さらに「さあ〜何時なりと〜」と繰り返されているところに、親神の「世界たすけ」への思いを感じ取ることができる。

また、台湾伝道についての「おさしづ」の中には、海外伝道、特に異文化社会への伝道ならではの事情についての神言がある。これは、山名大教会初代会長諸井國三郎の拝借地に、一條源次郎を担当として、台中教会を設立したいという願いに対するものである。

この教会設置に対しては、「さあ〜事情は願通り許し置こう〜。」とお言葉をいただいた。引き続いて「未だ信徒は無之又親神様と申す事も存ぜず又土人（下記注参照）へ布教致す事故御社を別に立てさして頂き度く願った。これに対して、さあ〜尋ねる事情〜、事情はそれ〜所々の事情によって、何よの事も委せ置こう、さあ〜委せ置こう〜。(明治30年9月12日)

とお許しをいただいた。

この「おさしづ」は、信徒がまだいないが、異文化社会である台湾で現地の人々に伝道するため、先に教会を設置して、信仰の対象となるお社を祀ることで、天理教の神のはたらきや信仰、儀礼様式がどのようなものであるかを現地の人々に知らしめ、今後の伝道を進めたいという願いである。この伺いに対して「所々の事情によって、何よの事も委せ置こう」とは、まさに「世界たすけ」を心待ちにされる親神の親心に満ちた言葉が示されていると言えよう。

この「おさしづ」に出てくる台中教会は、海外に設立された最初の教会であると考えられる（厳密には、当時台湾は日本の統治下にあったが、日本統治下となって日も浅く、言語や文化も日本と大きく異なっていたという意味で実質的には海外という意味である）。

海外伝道は、一部の日系移民コミュニティにおける伝道以外は、日本と言語も文化も異なる環境の中で進められるため、当然、日本国内とは異なる対応を迫られる。そのような時に、この「所々の事情によって、何よの事」の指す方法や内容については、これまでの海外伝道の歴史の中で積み重ねられてきた思案や話し合いがあり、さらに社会変容の中で、その具体的な方策について今後も変化を求められる可能性もあるが、親神の神意としては、異文化社会における所々の事情によって、この天理教の教えが誤りなくしっかりと伝えられるよう、大きな心で待ち望んでおられることが示されている。

[注]「土人」という表現は、現代では不適切なものと感じられるが、その指す意味は「現地に住む土着の人々」と解される。